D—6 過疎地における幼児の食生活（第3報）

大妻女大　家政　○八倉巻和子　前川當子

目的　児童の生活構造の時代的変遷に関する研究について協同研究を継続しているが，そのうち私共は食生活を担当している。家政学会に於て第1報は過密地東京の幼児を，第2報は過疎地秋田の幼児について発表した。今回は，再度秋田の幼児の食生活実態を調査し，都市の幼児の実態と比較しながら，その問題点を考察し，次回の事後指導の資料とするのが本研究のねらいである。

方法　調査日時—昭和49年7月15～17日。調査地—秋田県神岡町・皆瀬村・上小阿仁村の3か所。調査対象—5～6才長子，5才男児32人・女児32人，6才男児11人・女児8人計83人。調査方法—調査票を配布し留置記入法を行い，食物調査は面接法をとった。また身体状況については，県衛生局の協力により健診を実施した。

結果　1）対象幼児の身体発達は正常値の児70～76％，問題のある児30～24％ある。またKaup指数による評価では約4割の児がやせである。2）健康状態では，病気がちな児40％，食欲のない児35％，食事量の少ない児30％さらに全員に虫歯があるなど問題がある。3）栄養摂取状況は，各栄養素共各々所要量を下廻り，特にCa，VAなど不足が著しい。糖質比は60～64％で都市の幼児より高く，脂肪比は22～26％で低い。4）食品摂取は，米場である秋田県で米や味噌の摂取が予想に反して低い。肉類，嗜好飲料の摂取は高く，緑黄色野菜は低く都市幼児の傾向と同様である。特に乳類の摂取不足が目立つ。5）以上の研究から栄養に関係する①身体上　②食品摂取上　③調理担当者のちがい等の問題について検討したので報告する。

以上